

## 大学座談会（佐賀県山口知事×佐賀大学児玉学長）

学生時代の過ごし

————— お二人は、どのような大学時代を過ごされましたか。

（山口知事） 私が入学したのは、昭和59年だったでしょうか。その頃は、大学に入ることが一つの大きな目的であったと思います。

大学に入ると、何がそれまでと違うかという、自分の関心のある講座を選択するという事だったと思います。行政手続法のゼミとか東南アジアの近現代史とか財政学とか、自分で気に入った授業を選択して行くのだけれども、今思えば、あの頃学んでたことってとても大事なことで、今に必ず生きてるはずなのに、その関連性が当時認知出来ていなかったなあ、と。

もっと早く小中高のうちから大学ってどういうものかをもっと分かって、大学で学ぶときに、これが社会に行ったときにどう息づいてくるのか、などのガイダンスがあったら、もっと充実していたのになと思いますね。



（児玉学長） 私は高校生の時から教員になりたいと思っていました。父が教員だったのが影響したのだと思います。大学で少し専門的なことも勉強して、中学校の理科の先生になろうと思っていました。

（山口知事） 大学で履修してるときも、自分の将来像とともに、講座があるわけだから、結構身が入ったりするわけですね。

（児玉学長） いや、そんなに真面目な学生だったわけでもなく…

（山口知事） （笑）

（児玉学長） それでも、私は理工学部だったので、その課程とは別に教員免許を取るための授業をとらなきゃいけなかったもので、それは頑張らなきゃいけないという意識がありました。

けれど、大学に入ってからとはどちらかと言えば、専門の化学の勉強に力を入れていたとは思いますが。今と違って当時は、「大学生は自分で勉強するんだ」、みたいな雰囲気がありましたね。

（山口知事） そういえば理系の学生はすごく実験していた気がします。だからなかなか拘束時間が長くて、僕ら文系とは違ってましたね。

（児玉学長） 実験は夜中までやっていました。

## 学びを社会に生かす

————— 学長は長年佐賀大学で、教育そして大学運営に携わられておられましたけれども、最近の学生の特徴や志向につきまして、どのようにお感じになりますか。

(児玉学長) 学生達は、研究を続けて専門家になるという意識は低いのかなと感じています。一方で、知事がおっしゃるように、今大学で学んでいることが、将来こういうふうに自分の役に立つんだ、将来の職業とこういう関係があるんだ、こういう道に繋がっていくんだ、っていうのは、今のほうが昔よりも比較的十分教育されているように思います。ですけど、学生達にとって、目の前の勉強と、将来やりたいこととはなかなか結びついていないっていうか。今は、学生達の意識としては、卒業のために単位を取るだけ、なのかもしれません。将来こういう専門的なことまで分かるようになる、とかまで気が付けていない印象ですね。学生にとって大学での勉強が専門性を追求するのではなく、一般的な教養を学ぶとか、そういう意識でいるというのが、非常に強い気がします。化学を教えていましたが、化学者になるっていう意識を持っている学生は非常に少ないと思います。僕らの同級生では、やっぱり将来化学の研究とか仕事をするとか、そういう意識がとてもあったと思うんですけど、今はそういう意識が非常に希薄になっている気がします。



(山口知事) すごく残念なことですね。

(児玉学長) 専門性を高めることで他の人はできなくて、学んだ人だけがができるという状況が生まれることは、強みになることなんですけど、学生達には、社会の中でスペシャリティを目指す意識が少ない気がするんですね。

それは、今の学生達の方が多くの情報に触れて社会の幅広い進路を知ってしまってるがゆえに起きている、ってところもあるのかなと感じることもあります。

## 佐賀大学の方向性

————— 学長がお感じになっている、これからの佐賀大学の方向性ですとか課題とか、その辺があればちょっとお聞かせいただければいいんですが。

(兒玉学長) 国立大学ですから、やはり全国の人たちを対象として学びを提供する役割があります。進路先も全国に広がると思うんです。

だけど、同時に佐賀大学には、地元に対して人材を育成するっていう大きな役割を持っていると思います。それをもっと強化しないとイケない。

地元の高校生が、選んで、佐賀大学に入ってきてくれる。そして、将来、地元の仕事をするとするのは、一つのミッションだと思っています。

(山口知事) いろんな親御さんに聞いた話ですけど、佐賀に残りたい、と子供たちは言っていたけれども、自分に合う大学が佐賀になくて、他の県の大学に行かざるを得なかったって。その子供たちはもう帰ってこないという話を聞きます。

他の地域で勉強したい人って、それはそれで僕は尊いことだと思うし、佐賀を愛してくれればそれでいいわけだけど、佐賀で学びたいって熱望してる人たちに対して、門戸が狭いっていうことと、これからやるなら、先ほど言ったような小中高と社会との実装連携をしていきたいということ。

そして、私も長崎にりましたが、長崎では、大学間でお互い切磋琢磨しながら連携して、持ち味を生かしています。それがやっぱり、佐賀大学と西九州大学だけだとなかなか…だから、これは佐賀大学のためにも西九州大学のためにも、これを縦横の布というか、ネットワークにしたい、という思いです。

(兒玉学長) 今おっしゃいましたけど、長崎県にはいろんな分野の大学がありますので、様々な分野の先生たちが、近くにいらっしゃるといふ強みがあると思います。やはり佐賀県はそこがちょっと弱いかな、という気がします。



### ・ 県立大学構想

————— 改めて知事のほうから、県立大学の基本構想の思いを少し紹介していただければと。

(山口知事) 佐賀は8割以上の高校生が県外の大学に進学しています。今これだけの人材不足の中で、大きな損失になってると思いますし、実は直近でいうと、今、少子化って言いますが、大学進学率が上がっているんで、大学在籍者数は増えています。

(兒玉学長) そうですね。

(山口知事) 特に女子を中心に、大学進学率がまだ上がっています。佐賀県は、そういう機会もなかったこともあって、全国平均と比べるとまだまだ大学進学率が低い状況です。多くの方が大学に行く時代であるとしたならば、今ある佐賀大学と西九州大学と、もう一つ、県立大学をつくることの価値は極めて高いと。長崎みたいに8個あるところが9個目作るわけじゃなくて、2個目から3個目をつくるわけですから。

最近佐賀大学がTSUNAGIプロジェクトとかで、我々と協調しながらやっていただいている、本当に素晴らしいと思います。国立大学は国立大学で、それぞれの個性を生かす時代に入ってくると思うので、佐賀大学をさらに生かしたものとするためにも、県立大学という一つの核ができ上がることによって、お互いが生か合っていく世界をつくっていききたいなと思います。

ですので、今度の基本構想には、少子化の時代だけれどもむしろ佐賀県においては、余りにも今まで機会損失してきたので、大学の核をつくりたい。そして、そのときには、今から作るなら、それは研究部門についても教育部門についても、未来に向けて輝くような、実践的な実装ができるような大学にしたいなというふうに思いますので、一緒に取り組んでいただくことが大事だと思います。

(兒玉学長) ありがとうございます。まさにそのとおりだと思います。県内で幅広い分野の学生教育をしてきたのは佐賀大学ですが、どうしても画一的な形になりがちだと思うんです。県立大のようなパートナーが出てきて、県内の高校生もそれを、選択できるような状況になって、さらに新しい分野の勉強ができるということは、とても大事だと思います。

佐賀大学も今ある教育の分野を少し地元の方が必要と思われるような分野に変えていこうという思いもあるんですけど、やっぱり国立大学としての役割の中で、特定の分野だけに特化していくことは難しい面があります。ですので、それを基本的なミッションとされる県立大が別にあるとあって、一緒にやっていけるというのはとても大きなことだと思います。

(山口知事) お互い特性がまた違ってくるので、単位互換とかできるわけですから。

(兒玉学長) 新しい大学教育、高等教育というか、そういうのが出来ていくんじゃないかと、とても期待しています。

(山口知事) 佐賀県立大学だから佐賀大学とのネットワークも活かしやすいし、佐賀県立大学と西九州大のネットワークもそうですね。今の県の仕事とかそういったところも含めて。だから、いい関係のトライアングルが、出来やすくなりますよね。

(兒玉学長) 人材育成をですね、ぜひ、橋渡しをしていただきたいと思います。



————— 最後にお二方から、ちょっと言い足りないことやお互いに対することも一言ずつあればお願いします。

(兒玉学長) 県立大、新しいライバル校ができるというふうな捉え方をされる面がとても大きいんですけど、そうではない。

先ほど知事がおっしゃったように、一緒に高等教育をやっていくパートナーが増えるんだ、という意識で、佐賀大学も、県立大の存在で、さらに磨きをかけていけるように進んでいきたいと思えます。

(山口知事) 兒玉学長にそうおっしゃっていただけるってことで、万人の味方をつけたような。高等教育機関の連携っていう意味で、産業界も期待してますし、これから佐賀の、高等教育機関の時代が来るのかな。

もともと教育制度っていうのは、学制発布もそうですけれども、佐賀県人が、今のこの国の礎をつくってきました。今は、どうしてもこう、周回遅れになっている面もありますけれど、逆に、今からだからこそ、チャレンジャーとして、新しい時代を切り開いていけるような大学間連携をつくっていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。



(兒玉学長) こちらこそ、よろしくお願いします。